

## 児童中期・後期の友だち集団関係性が 社会的スキルの発達に及ぼす効果

堂 野 恵 子

### The Effects of the Group-Friendship Relations on the Development of Social Skills in Fourth and Fifth Graders of Elementary School

Keiko DOHNO

**Key Words:** 社会的スキルの発達, 友だち集団関係性, Kiss-18 (児童版)

人間関係の希薄化が指摘されて久しい現在, 教育の場では人格発達における社会化, 特に対人関係の発達・育成について以前にもまして強い関心もたれてきている(堂野, 2000)。こうした視点に立った発達・教育心理学的アプローチとして, 「社会的スキル (social skills) の発達」が注目されている(例えば, 堂野・光本・河内, 2006; 渡辺, 2007, 堂野・光本, 2009)。社会的スキルは対人関係の形成や維持に関する基本的要因であり, 具体的には他者と適切に関わるために用いられる行動・技能であって, 我々が円滑な社会生活を送り適応を図る上で重要な機能を果たす(堂野, 2000)と捉えられている。相川(1996, 2000)は従来の諸研究を総括し, 「対人場面において, 個人が相手の反応を解釈し, それに応じて対人目標と対人反応を決定し, 感情を統制した上で対人反応を実行するまでの循環的過程」と定義している。

社会的スキルの発達研究は, 我が国では1980年代頃から活発化してきたが(松尾, 2004), その後幼児・児童から成人, 障害児から健常児まで幅広い研究が展開している。その一つに当研究室で取り組んできた一連の研究がある。これらでは, 堂野ら(2006)で示したように, 社会的スキルの発達過程を「自己制御性」, つまり「自己主張的側面と自己抑制的側面のバランスのとれた発達」の視点から捉えている。またこうした視点からは, 「一般的自己主張・自己抑制」(柏木, 1986)とともに, むしろそれ以上に, その場面・状況で自他のどちらに「不当性」があるかを判断し, 「相手に非があると認知する」とときには相手の非について堂々と自己主張し, 一方「自分に非があると認知する」とときには自分の非を認めて我慢・自己抑制するという「不当性認知的自己主張・自己抑制」が重要であるとしている。つまり「不当性認知的自己制御」を中心に「一般的自己制御」も含めた「自己制御性」の発達から, 人の社会的スキルの発達を検討しようとする研究パラダイムである。筆者らは, このパラダイムに基づいて個人の社会的スキルを測定する「自己制御尺度(幼児・児童版, 及び青年版)」を作成し, これを用いてこれまで, 生涯発達の視点から, 幼児期(河内, 2005a), 児童期(堂野ら, 2006), 青年期の中学生・高校生(光本・堂野・河内, 2006; 堂野ら, 2009), 高齢期(光本・堂野, 2006)といった発達段階を追っての検討, また施設幼児と家庭幼児の比較(河内, 2005b), 施設児童と家庭児童の比較(堂野・光本, 2006)等も行なってきた。

しかし社会的スキルの発達研究には、上記と異なる研究パラダイムもある。伝統的ともいえるこちらでは、社会的スキルの発達は「自己制御性」の発達に特に焦点化されるのではなく、それも含めてより「広範に」、「包括的に」捉えられている。その代表的なものが、「Kiss-18」(菊池, 1988)である。これは、もともとGoldstein, Sprafkin, Gershaw & Klein (1980)の青年用リストに基づき、日本版として開発されたものである。因子分析により、社会的スキルは、①“相手とのかかわりで、仕事があてばきと処理できるかどうか”といった「問題解決のスキル」、②“まわりの人たちとのトラブルが起きても、それを上手に処理できるか”といった「トラブル処理のスキル」、③“知らない人とでも、すぐに会話が始められるか”といった「コミュニケーションのスキル」の3因子構造からなることが明らかにされている。また他の多様な人格尺度との相関研究からもKiss-18の妥当性の高さが認められるとされ(菊池, 2007)、現在も多くの「青年」の社会的スキルを検討する研究に用いられている。社会的スキルの発達を検討する上では、これまで筆者らが取り組んできた「自己制御性」の発達の視点からの検討と共に、「Kiss-18」を用いてより広範・包括的な一般的スキルを検討することもまた重要だと思われる。

ところで教育相談の場では、不登校やいじめ等の問題の背景について、友だち関係を巡るトラブルや葛藤の存在、それも当事者間に見られる社会的スキルの発達の未熟さが背景として指摘されることが多い(例えば、酒井, 2007; 庄司, 2007)。また、堂野ら(2009)では中学生の「学校適応」が取り上げられ、社会的スキルとしての「自己制御性」の発達との関連、つまり「自己主張」と「自己抑制」のバランスのとれた発達との関連について検討されている。その結果、男子では有意な関連が見出され、LL型(「自己主張と自己抑制がともに未発達な」、いわば自己制御性の発達が不十分と考えられる型)の学校適応は他の群に比べて著しく有意に低くなっていた。また、LH型(「相手に非があると認知する」ときにも相手の非について堂々と自己主張しない(L)で、一方「自分に非があると認知する」とときには我慢・自己抑制を十分する(H)という型)の学校適応は、自己制御性の最も発達しているHH型(自己主張と自己抑制がともに発達し、しかもバランスのとれている型)と同程度に高くなっていることが見出された。

このように社会的スキルの発達が、友だち関係を巡るトラブルや葛藤、ひいては学校適応に与える多大な影響性が示唆されるところであるが、一方相互関係性の視点からは、友だち関係のあり方そのものが、社会的スキルの発達に与える影響性も当然予想されるところである。ところで岡田(1993)は青年期の「友だちグループ内での関係性」のあり方(以下、これを「友だち集団関係性」とする)について、次の3類型を見出している。①「やさしさ志向」型である。これは、特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切に、友達に「気を遣って」関わることを特徴とする。②「対人退去」(「ふれあい回避」)型である。これは、友だち関係の深まりを避け、互いに傷つかぬよう・領域を侵さないよう「距離を置いた関わり方」をするのを特徴とする。③「群れ志向」型である。これは、友だちといつも一緒にいることを好み、しかも「深刻さを回避」して「楽しさを求める」などを特徴とする。次に岡田(1995)はこの3種の友だち集団関係性の特徴を測定する質問紙を作成し、因子分析の結果3因子を抽出して3下位尺度17項目からなる「友人関係尺度」を作成している。3下位尺度は、友だちに気を遣いながら関わる「気遣い」尺度(6項目)、深い関わりを避けて互いの領域を侵さないなどの「ふれあい回避」尺度(6項目)、集団で表面的な面白さ志向の関わり方をする「群れ」尺度(5項目)、である。

岡田(1993)の見出した青年期の友だち集団関係性の3類型は、児童期でも成り立つのであろうか。これについて本研究では、特にギャング・エイジ開始期の小学校中学年(4年生)から高

学年（5年生）にかけて取り上げ、友だち集団関係性の発達の変化を検討することを第一の目的とした。その際、上記の青年期に典型的とされる3類型に加えてその「混合型」も想定し、出現率を比較することにした。さらに、従来取り上げられていない「友だち集団関係性」と「社会的スキルの発達」との関連について検討することを第二の目的とした。その際、先述したように社会的スキルの発達については、これまで筆者らが取り組んできた「自己制御性」の発達の視点からの検討ではなく、「Kiss-18」を用いてより広範に、包括的に検討することにした。なお、「Kiss-18」は本来「青年用」に開発されたものであることから、小学生や中学生を対象とした場合は、質問項目を一部修正して使用するという方法が従来よく用いられてきている（例えば、庄司，1994）。本研究でも、この方法を採用し、因子分析により尺度の妥当性の検討を行うことにした。

## 方 法

1. 調査対象：広島県内小学校の4年生108名（男子60名，女子48名），5年生115名。（男子58名，女子57名）
2. 調査時期：2008年6月
3. 調査内容：

### (1) 「社会的スキル尺度：Kiss-18（児童版）」

「青年期」の社会的スキルを広範に、包括的に測定する「Kiss-18」（菊池，1988）の18項目に基づき「小学生」向けに一部修正し、小学校教員に子どもの「分かりやすさ」の視点からチェックしてもらった。この質問項目について小学4年生と5年生に無記名式でそれぞれ5段階評定（「いつもそうだ」、「たいていそうだ」、「どちらともいえない」、「たいていそうでない」、「いつもそうでない」）を求めた。結果の因子分析により尺度の妥当性の検討を行い、内的整合性を十分に満たすと判断された全18項目を、「Kiss-18（児童版）」として以後の分析に用いることにした。Kiss-18（児童版）の質問項目、因子分析結果については、「結果と考察」の1（Table 2）に後述する。

### (2) 「友人関係尺度（児童版）」

「青年期」の友だち集団関係性の特徴を、「気遣い」、「ふれあい回避」、「群れ」の3下位尺度から測定する「友人関係尺度」（岡田，1995）の17項目に基づき、「小学生」向けに一部修正し、小学校教員に子どもの「分かりやすさ」の視点からチェックしてもらった。この質問項目について小学4年生と5年生に無記名式でそれぞれ2件法（「はい」、「いいえ」）により回答を求めた。岡田では「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階評定となっていたのを今回2件法に変えたのは、教員の「この質問内容では、小学生にとって4段階評定では難しい」との助言に従ったものである。質問項目の一部修正や回答方法の変容のため（1）と同様に因子分析が必要かとも思われたが、修正の程度が少ないこと、また2件法によるデータでの因子分析の実施には問題もうかがえること、さらに、青年期の友だち集団関係性の類型はギャング・エイジに入る小学校中・高学年でも大略成り立つのではとの仮定に立っての検討であることから、型判別を行う3下位尺度については因子分析による項目の削除は行わない方が適切と判断した。従って、岡田の青年版を参照して今回作成した全17項目を、「友人関係尺度（児童版）」として以後の分析に用いることにした。質問項目をTable 1に示す。

Table 1 「友人関係尺度（児童版）」の質問項目

質 問 項 目：【「友だちとのつきあい方」について、「はい」、「いいえ」の2件法】
<p><b>尺度1：【気遣い】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. あなたは友だちに気をつかうほうですか。</li> <li>4. おたがいにきずつけないように気をつかうほうですか。</li> <li>7. 自分のことはあとまわしにしても、友だちのために行動するほうですか。</li> <li>10. 友だちとのやくそくは、かならず守りますか。</li> <li>13. 友だちからどう見られているか気になりますか。</li> <li>16. 友だちのためにならないことは決してしませんか。</li> </ol> <p><b>尺度2：【ふれ合い回避】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. あなたは、相手が気にしていることを、言ったりふれたりしないほうですか。</li> <li>5. 友だちのしゅみ・習い事や友だちとの関係についてあまりふれないほうですか。</li> <li>8. 友だちにいろいろとよくたよるほうですか。（逆転項目）</li> <li>11. 相手の言うことにいちいち口をはさみませんか。</li> <li>14. 友だちとしんけんな話し合いをすることがありますか。（逆転項目）</li> <li>17. 友だちに、こまったことや悩んでいることを相談することができますか。（逆転項目）</li> </ol> <p><b>尺度3：【群れ】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>3. じょうだんを言って相手をわらわせることが好きですか。</li> <li>6. ウケるようなことをよくするほうですか。</li> <li>9. 友だちといっしょにすることが多いですか。</li> <li>12. 楽しい雰囲気になるように気をつかいますか。</li> <li>15. 一人の友だちと、とくべつ仲良くするよりはグループで仲良くするほうが好きですか。</li> </ol>

## 結 果 と 考 察

### 1. Kiss-18（児童版）の検討：因子分析

各児童について、各質問項目の評定結果に基づいて1段階1点～5段階5点までの得点化を行い、これら18項目の合計を求めた。次に青年期を対象とするKiss-18の質問項目を一部修正して児童用として作成した今回の尺度の妥当性を検討するために、この合計得点について主因子法・プロマックス回転による因子分析（Table 2）を行った。因子負荷量0.43以上の項目を採用したところ2つの因子に項目が集中し、寄与率は43.98%であった。第1因子は、「勉強や係の仕事のもくひょうを上手に立てることができる」、「まわりの人たちが自分とちがった考えを持っていても、うまく協力できる」などの項目であり、「問題解決に向けての協調的関係の展開」（10項目、信頼係数： $\alpha = .876$ ）と名付けた。第2因子は、「知らない人にも、すぐに話しかけられる」、「人にやってもらいたいことを、うまくたのむことができる」などの項目であり、「人への率直な自己表出」（8項目、信頼係数： $\alpha = .857$ ）と名付けた。小学生用として内的整合性を十分に満たすと判断されたこの18の質問項目を最終の尺度項目とし、改めて「Kiss-18（児童版）」と命名し、以後の結果の分析に用いた。具体的には、先述した個人別に求めた18項目の評定得点の合計を、改めて各自の社会的スキル得点（ $R$ ：18～90点）とした。得点が高いほど、その個人の社会的スキルは高いことを意味する。

Table 2 「Kiss-18 (児童版)」に関する因子分析表 (最尤法, プロマックス回転)

質 問 項 目	因子負荷量	
	因子 1	因子 2
因子 1 : 問題解決に向けての協調的関係の展開 ( $\alpha = .876$ )		
18. 勉強や係の仕事のもくひょうを上手に立てることができる	.836	-.123
9. 係の仕事などをするとときに, 何をどうやたらよいか考えて進めることができる	.821	-.140
8. けんかをした相手と, 上手に仲直りができる	.651	-.036
12. 係の仕事などをするとときに, その仕事をよりよくする方法を見つけることができる	.579	.141
17. まわりの人たちが自分とちがった考えを持っていても, うまく協力できる	.546	.122
4. 相手がおこっているときに, うまく気持ちをおちつかせてあげることができる	.530	.175
15. はじめてあった人に, じこしょうかいが上手にできる	.503	.168
14. あちこちからちがう話が伝わってきても, いろいろな情報から, 正しい情報をえらぶことができる	.483	.137
16. 何か失敗したときに, すぐにあやまることができる	.464	.086
3. 人がこまっているときに, 助けてあげることができる	.454	.241
因子 2 : 人への率直な自己表出 ( $\alpha = .857$ )		
6. 知らない人にでも, すぐに話しかけられる	-.177	.742
5. まわりの人とすぐに話ができる	.006	.715
2. 人にやってもらいたいことを, うまくたのむことができる	.047	.695
10. 友だちが話しているところに, きがるに入っていく	.031	.657
1. 友だちと話していて, 会話が続く	.089	.602
7. こわさや, おそろしさを感じたときに, それを相談したり自分で解決したりすることができる	.219	.469
11. 相手からまちがいや失敗をせめられたときに, 自分の考えや気持ちを伝えられる	.229	.437
13. 自分の思っていることや気持ちを, すなおにあらわすことができる	.298	.429

## 2. 学年別にみた友だち集団関係性の類型別出現率

各児童について, 「友人関係尺度 (児童版)」の各質問項目 (Table 2) の評定結果に基づいて「はい」を1点, 「いいえ」を0点として得点化し, 下位尺度別にその合計を求め, さらに下位尺度の項目数が異なることから平均得点を算出した。0点~1点に分布することから, 中点の0.5点を基準として, 以下の3つの条件に基づき, 各自の友だち集団関係性の型を決定した。〈条件〉(i) 第1位が0.6以上, かつ2位との差が0.2以上→1位が何かにより, ①「やさしさ志向型」, ②「ふれあい回避型」, ③「群れ志向型」のいずれかの群とした。(ii) 第1位が0.6以上, かつ1位と2位との差が0.1以下→この場合は, 3つの型のうちいずれか2つの「混合型」とした。(iii) 第1位は0.5以下, または第1位, 第2位, 第3位間の差が0.1以下→この場合は, どの型にも属さない「その他」とした。

Figure 1 には, 学年別にみた友だち集団関係性の類型別出現率が示されている。 $\chi^2$ 検定の結果4年生では類型間に有意差が見出され ( $\chi^2(6) = 71.78, p < .001$ ), 下位検定の結果, ①やさしさ志向型 (33.33%), ①+③のやさしさ・群れ志向混合型 (25.00%), ③群れ志向型 (22.22%) 間には有意差がなく, それぞれ残りの型 (②型, ①+②型, ②+③型, その他) に比べて有意に多くなっていた。5年生でも類型間に有意差が見出され ( $\chi^2(6) = 69.61, p < .001$ ), 下位検定の結果, ③群れ志向型 (30.44%), ①やさしさ志向型 (26.96%), ①+③のやさしさ・群れ志向混合型 (20.00%) 間には有意差がなく, それぞれ残りの型に比べて有意に多くなっていた。また②ふれあい回避型は, 4年生4名 (3.85%), 5年生3名 (2.61%) と, 両学年ともに出現率が極めて小さかった。こうした両学年の出現傾向には $\chi^2$ 検定の結果有意差は見出されず, とともに①型, ③型,



①+③混合型が残りの型に比べて多く、また②型は極めて少なかった。

つまり、小学校中学年から高学年にかけての友だち集団関係性は、第一に、特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切に、友だちに気を遣いながら関わることを特徴とする①「やさしさ志向」型、また、友だちといつも一緒にいることを好み、しかも深刻さを回避して楽しさを求めるなどを特徴とする③「群れ志向」型がそれぞれ多い点では、青年期（岡田，1993）の特徴に類似していた。しかし第二に、この両者の特徴がミックスした①+③「やさしさ志向・群れ志向混合」型が多い点、また、友だち関係の深まりを避け、互いに傷つかぬよう・領域を侵さないよう距離を置いた関わり方をするのを特徴とする②「対人退去」（「ふれあい回避」）型が極めて少ない点では、青年期との違いが見出された。

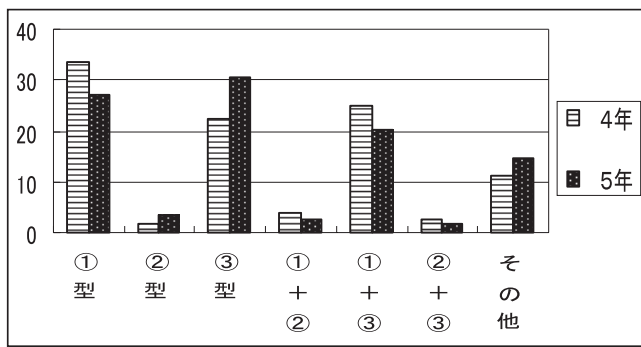


Figure 1 友だち集団関係性の類型別出現率

### 3. 友だち集団関係性と社会的スキルの発達との関連

小学校中学年から高学年にかけての友だち集団関係性と「Kiss-18」からみた社会的スキルの発達との関連を検討するために、学年別に、友だち集団関係性の類型別の社会的スキル得点の平均を算出した。その際類型としては、「結果・考察」の2で出現率が低かった4つの型（Figure 1 参照）は除き、①「やさしさ志向型」、③「群れ志向型」、①+③の「やさしさ・群れ志向混合型」の3つの型のみを取り上げた。Figure 2にこれを示した。なおSDは、4年生については、①型11.28、③型10.50、①+③型11.03であり、また5年生については、①型9.58、③型11.99、①+③型9.28であった。Figure 2について、類型（①型、③型、①+③型）×学年（4年、5年）の3×2の2要因分散分析を行ったところ、類型の主効果、学年の主効果ともに有意ではなかった。しかし、両要因の交互作用については10%水準の有意傾向に近い値が得られたことから、一応下位検定を行ってみた。4年生では、社会的スキル得点は①型71.3、③型70.3、①+③型69.6と3つの類型間に有意差は見られず70点前後であった。これら3つの得点は、全員が4段階である場合の理論的得点の72点に極めて近いといえる。つまり、ギャング・エイジに入ったばかりの4年生が既に「かなり高い」社会的スキルを発達させており、これは児童がどの友だち集団関係性の型であるかにはあまり関係がないことが示されたといえよう。一方5年生では、社会的スキル得点は①型72.4、③型68.4、①+③型75.2であり、下位検定の結果、①+③型の社会的スキル得点は③型に比べて5%水準で有意に高くなっていた ( $t(56) = 2.27, p < .05$ ) が、①+③型

と①型間、及び①型と③型の間には有意差は見出されなかった。つまり、①「やさしさ志向」型及び③「群れ志向」型とともに、全員が4段階である場合の理論的得点の72点または72点弱であり、「かなり高い」社会的スキルを発達させているといえる。しかし、両者の特徴がミックスした①+③「やさしさ志向・群れ志向混合」型ではこれをさらに上まわっており、少なくとも③「群れ志向」型との間には社会的スキルの発達に明瞭な差が認められたといえる。5年生では、社会的スキルの発達は、児童がどの友だち集団関係性の型であるかにより影響を受けていることが示されたといえよう。また①+③型においてのみ4年生と5年生間に5%水準で有意差が見出された ( $t(48)=2.20, p<.05$ )。

以上の結果より、小学校中学年から高学年にかけては、「やさしさ志向」や「群れ志向」という単独の型の友だち集団関係性でも「かなり高い」社会的スキルの発達が可能となるものの、両者の特徴がミックスしたような関係性、つまり「特定の友だちやグループのメンバーとの関係性を大切に、友達に気を遣いながら関わる」が、一方でそれが重すぎないように、場面によっては「友だちといつも一緒にいることを好み、深刻さを回避して楽しさを求めるなどの関わり」も併せて展開するようになり始めたとき、社会的スキルの発達はいつそう進むことが示されたといえよう。ただ5年生の①+③型の出現率が20.00%であることから、小学校高学年においてもこの「やさしさ志向・群れ志向混合」型の友だち集団関係性は、発達を始めたばかりともいえる。これにつづく青年前期の中学生では、ギャング・エイジまっただ中で「友だちグループとしての関係性」のあり方が個人にとってより重要性をしめるようになる（例えば、堂野，1985；酒井，2007）ことから、「やさしさ志向・群れ志向混合」型の友だち集団関係性が与える影響はさらに増大するのではなかろうか。さらに同じく青年期とはいえ、ギャング・エイジを抜けだして「友だちグループとしての関係性」のあり方よりも「個と個としての友だち関係」のあり方、いわば親友関係といった方が個人にとってより重要性をしめるようになる青年中期・後期の高校生・大学生では、友だち集団関係性と社会的スキルの発達との関係は、また違った様相を見せるのではなかろうか。今回は児童中期・後期のみを対象としたが、「生涯発達の視点」（例えばNewman & Newman, 1975；Baltes, Reese & Lipsit, 1980；Lerner & Bush-Rossangel, 1981；東・柏木・高橋, 1993；堂野, 1993；鈴木, 2008）からは、青年期以降の友人関係性と社会的スキルの発達との関係性について検討することの必要性が示唆されよう。今後の検討課題といえる。

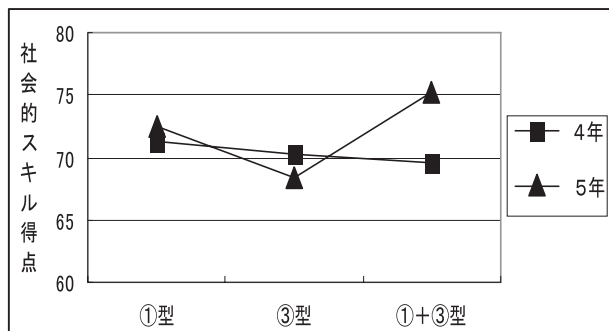


Figure 2 友だち集団関係性からみた社会的スキル

ところで、本研究では分析の第一段階として因子分析を実施することから、男子・女子コミにして分析し性差の検討は行わなかった。しかし小学生では心理的発達面において女子の方が男子より成熟が早いと指摘されており（例えば、堂野、1985）、女子の方が早く青年期の友だち集団関係性への移行が起こる可能性は十分考えられよう。これに関して例えば庄司（1994）は、Kiss-18を参考にして小・中学生の社会的スキル測定尺度を開発する研究の中で、男子と女子では対人関係の持ち方や内容に違いがあることを見出している。さらに庄司（2007）は、菊池（1988）がKiss-18で測定される社会的スキルに性差は見られないとしていることを取り上げ、両研究の差異はどこからくるのだろうかとの興味深い問題提起をしている。つまり、測定対象が小・中学生か青年後期の大学生であるかといったことや質問項目の内容といった「方法的」な違いからくることなのだろうか、それとも、近年学校関係者から指摘されることの多い男児の対人行動の女児化（仲間との同調行動の増大）といった、より「本質的な発達の問題」を含むものだろうかとの疑問であり、こうした検討の必要性を指摘している。また渡辺（2007）も、子どもたちの大半がすでに幼少期から同性集団に属して青年期に至るまで強い影響を受けることを考えると、同性の友だち関係と異性の友だち関係とでは異なる社会的スキル、つまりジェンダーによる違いのある可能性を指摘している。また中学生を対象にして「自己制御性」からみた社会的スキルの発達と適応との関係を検討した堂野ら（2009）においても、男子と女子とでは明確な性差が見出されていた。こうした先行研究からは性差の検討の必要性が示唆されるのであり、これは次回の報告としたい。

#### （付記）

本論文は、筆者の指導の下に行われた平成20年度安田女子大学文学部心理学科卒業研究（古川、2009）の調査資料の一部を用いて、社会的スキルの発達論や測定論の視点からの新たな問題提起と因子分析による検討も加えて、研究を行ったものである。資料の利用に快く応じてくれた古川彩子さんに御礼申します。

#### 引 用 文 献

- 相川 充・津村俊充（編）（1996）. 社会的スキルと対人関係 対人行動学シリーズ 誠信書房.  
 相川 充（2000）. 人づきあいの技術：社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学 20 サイエンス社.  
 東 洋・柏木恵子・高橋恵子（編・監訳）（1993）. 生涯発達の心理学 新曜社.  
 Baltes, P. B., Reese, H. & Lipsitt, L. (1980). Life-span developmental psychology. *Annual Review of Psychology*, 31, 65-110.  
 堂野恵子（1985）. 青年期の特性と指導 堂野佐俊・堂野恵子（編）教育心理学要論 北大路書房 pp.43-48.  
 堂野恵子（1993）. 人間の学習と発達－生涯発達の基礎論的展開－ 北大路書房.  
 堂野恵子（2000）. 社会的発達と対人関係 堂野佐俊・堂野恵子 発達理解の心理学 おうふう出版 pp.189-227.  
 堂野恵子・光本容子・河内 愛（2006）. 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究（1）－小学生の分析－ 児童教育研究, 15, 73-78.  
 堂野恵子・光本容子（2006）. 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究（3）－施設児童と家庭児童の分析－ 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 11, 1-10.  
 堂野恵子・光本容子（2009）. 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究（4）－中学生における学校適応との関連－ 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 14, 35-50.  
 古川彩子（2009）. 小学生の社会的スキルの発達と友人関係および自尊感情との関連 平成20年度安田女子



大学文学部心理学科卒業論文。

- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J. & Klein, P. (1980). *Skill streaming the adolescent: A structured learning approach to teaching prosocial skills*. Research Press.
- 柏木恵子 (1986). 自己制御 (self-regulation) の発達 心理学評論, 29, 1, 3-24.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店.
- 菊池章夫 (2007). Kiss-18の構成 菊池章夫 (編) Kiss-18ハンドブック 川島書店 pp.23-36.
- 河内 愛 (2005a). 幼児の自己制御性からみた社会的スキルの発達 児童教育研究, 14, 95-100.
- 河内 愛 (2005b). 児童養護施設における幼児・児童の自己制御性からみた社会的スキルの発達 - 施設指導員の自己制御性との関連 - 安田女子大学大学院修士論文.
- Lerner, R. M. & Bush-Rossangel, N. A. (1981). *Individuals as producers of their development*. New York: Academic Press. 上田礼子 (訳) (1990). 生涯発達学 岩崎学術出版.
- 松尾直博 (2004). 社会性の発達 糸井尚子・渡辺千歳 (編) 発達心理学エチュード pp.182-195.
- 光本容子・堂野恵子・河内 愛 (2006). 自己制御性からみた社会的スキルの発達に関する研究 (2) - 中学・高校生の分析 - 児童教育研究, 15, 79-83.
- 光本容子・堂野恵子 (2006). 施設高齢者における主観的幸福感の研究 (5) - 主観的幸福感と自己制御性 - 自己主張と自己抑制 - からみた社会的スキルとの関連 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 12, 25-34.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1975). *Development through life: A psychological approach*. 福富 護・伊藤恭子 (訳) (1990). 生涯発達心理学 川島書店.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 酒井 厚 (2007). 仲間関係と家族 酒井 朗・青木紀久代・菅原ますみ (編) (1993). お茶の水女子大学 21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学3, 子どもの発達危機の理解と支援 - 漂流する子ども 金子書房.
- 庄司 一子 (1994). 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也 (編著) 社会的スキルの心理学 - 100のリストとその理論 川島書店 pp.201-218.
- 庄司 一子 (2007). 対人関係の問題と子どもへの援助 菊池章夫 (編) Kiss-18ハンドブック 川島書店 pp.180-187.
- 鈴木 忠 (2008). 生涯発達のダイナミクス - 知の多様性 生き方の可塑性 - 東京大学出版会.
- 渡辺弥生 (2007). 発達・教育分野での「社会的スキル」の課題と展望 菊池章夫 (編) Kiss-18ハンドブック 川島書店 pp.196-204.

## Summary

This article focused on the effects of the group-friendship relations upon the development of social skills in fourth and fifth graders of elementary school.

Fourth graders (60 boys and 48 girls) and fifth graders (58 boys and 57 girls) participated the questionnaire asking their group-friendship relations, which was revised partly from adolescent version (Okada, 1995). They also participated 'Kiss-18 (child version)', which was partly revised from adolescent version (Kikuchi, 1995).

The main findings were as follows.

- (1) The factorial analysis of 'Kiss-18 (revised : child version)' showed two significant factors, one was named "practice of harmonic and cooperative relationship for task solution" (10 items), and the other was named "frank self expression to others" (8 items). Each factor showed high  $\alpha$  coefficient, so 'Kiss-18 (revised : child version)' was found to have high reliability.
- (2) Concerning childhood group-friendship relations, both graders showed high ① 'gentle and care-oriented style', ③ 'flock together-oriented style', and '①+③ mixed style' just like

adolescent (Okada, 1993), but showed very low ② 'human relation avoidance-oriented style' unlike adolescent.

- (3) The two factorial analysis of variance (group-friendship style  $\times$  grade ) of the social skill scores showed only nearly significant interaction tendency. Subordinate analysis showed that concerning '①+③ mixed style' fifth graders achieved significantly higher social skill scores than fourth graders.

Concerning the development of social skills from middle graders to senior graders of elementary school, having varieties of group-friendship styles was suggested to be effective. Concerning the development of social skills in junior high school students of the early adolescence, the tendency might also be true. But it might be different in high school students of the middle adolescence or in university students of the late adolescence. From the view point of life-span development, the inspection of these predictions would be important.

[2009. 9. 28 受理]